

からにはならない。二諦は、むしろ相即すると言う中道的立場が龍樹の中観哲学である。そのことは、前掲の第二十四章第八偈や次の絶唱によっても首肯されよう。空性の成立する人には、すべてが成立する。空性の成立しない人には、一切が成立しない。(第十四章)

縁起と空とを破る汝は、世間的な一切の慣習を破るのである。(第二十四章)

世諦と第一義諦と異なることなし。何を以ての故に。世諦如は即ち是れ第一義如なるが故なり。衆生は是の如き如を知らず見ざるが故に、菩薩摩訶薩は、世諦を以て若しくは有、若しくは無となす。

註① Ratnāvali (2-18) <Dr. G. Tucci, ed., The Ratnāvali of Nāgārjuna, Buddhist Sanskrit Text, No. 10, p. 302> (以下 Ratnāvali と略称)

② 「我今已得此無上法。甚深微妙難解難見。息滅。清淨智者所知。非是凡愚所能及也」長阿含經卷一・大本經(大正一・八b)。「世尊知是法甚深微妙。相非鈍根所。及是故不欲説」鳩摩羅什訳「中論」觀四諦品第十三偈(大正三〇・三三三a)° Ratnāvali 2-16~20 (ibid., p. 302)

③ 過去現在因果經卷三(大正三・六四二c)

④ 「所謂超過五蘊入第一義。非言能説不可聽聞」方広大莊嚴經卷十(大正三・六〇三a)

⑤ 「若以此法為人演説。彼等皆悉不能了知。唐損其功無所利益」方広大莊嚴經卷十(大正三・六〇三a)

⑥ 過去現在因果經卷三(大正三・六四二c)

⑦ 「諸仏阿耨多羅三藐三菩提無一字無説」大品般若經問住品第二十七(大正八・二七五a)

⑧ The Laṅkāvatāra Sūtra p. 143, l. 1. (Bunyu Nanjo and M. A., D. Litt, ed., Kyoto, 1956)

⑨ L. de la Vallée Poussin, ed., Prasannapadā nāma Mūlamādhyamakavṛtti p. 57, ll. 7-8. (以下 Prasannapadā と略称)

⑩ ibid., p. 374, ll. 2-3.

⑪ この無記といふのは Ratnāvali (1-73), (2-15) などにも説かれている。

⑫ 金剛般若經(大正八・七五一a)

⑬ The Madhyāntavibhāṅgikā p. 124, l. 16, ed., by Dr. S. Yamaguchi.

⑭ ibid., p. 124, l. 18.

⑮ Prasannapadā p. 493, l. 6.

⑯ 安井広済博士著「中観思想の研究」四十三頁参照。

⑰ 大智度論卷九〇(大正二五・六九二b)

⑱ 前掲書卷七五(大正二五・五八四a)

⑲ 前掲書卷三四(大正二五・三二四a)

⑳ 前掲書卷四六(大正二五・三九四c)

㉑ 鳩摩羅什訳「中論」第二十四章第十八偈(大正三〇・三三三a)

㉒ cakṛdīny upadāya rathāṅgāni rathāḥ prajñāpyate. (Prasannapadā p. 504, l. 9)

㉓ 「汝謂有衆生。此即惡魔見。唯有空陰聚。無是衆生者。如和合衆生材。世名是為車。諸因緣合假名為衆生」雜阿含經卷四十五(大正二・三二七a)

㉔ 「縁起なるが故に無自性」(… svabhāvena na vidyate, pratītya-samutpannatvāt.) Prasannapadā p. 440, ll. 1-2.

㉕ 「無自性なるが故に空」(ac ca nīsvabhāvatvāc śūnyam) ibid., p. 500, ll. 15-16.

㉖ ibid., p. 373, ll. 9-10.

㉗ prapañca に対する梶山雄一博士の訳語。同博士稿「中論における無我の論理」(中村元博士編「自我と無我」所収、四八二頁以下参照)

㉘ 大智度論卷八五(大正二五・六五三b)

補陀落渡海のコースとその問題点

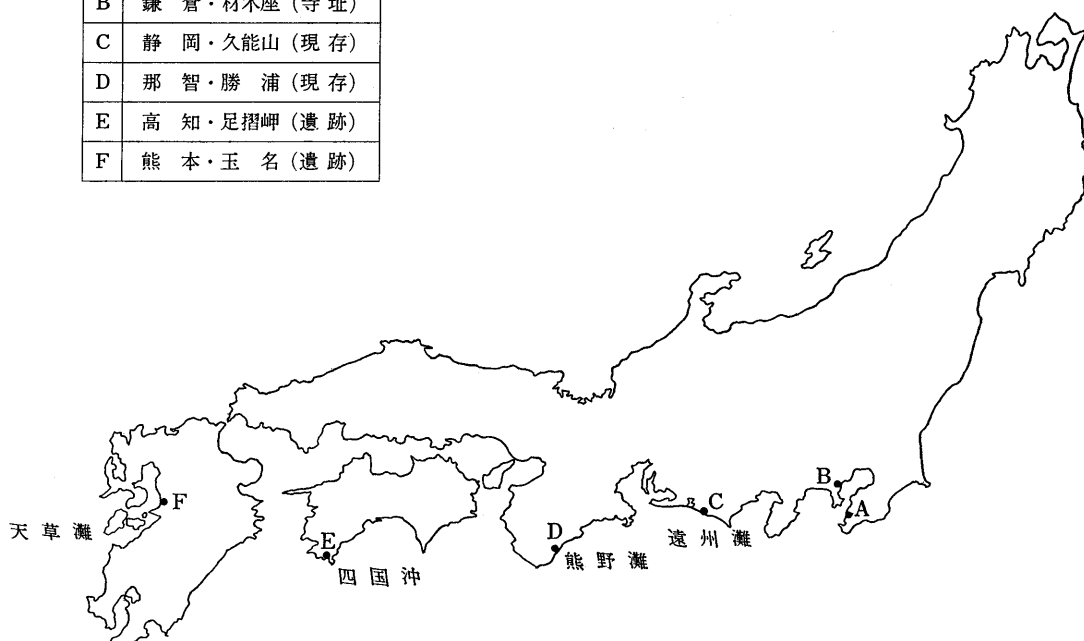
妹尾 匡海

日本における補陀落信仰については、本学の成田俊治先生が、昭和三十三年に「補陀落信仰の性格」^①という論文を発表しておられるが、この論文の中において成田先生は、日本における補陀落信仰が三つの発展段階においてとらえられることを指摘しておられる。

即ち、①補陀落浄土を説く『華嚴經』等の輸入以後、補陀落山を一種の他界浄土として死者の往き住むべき菩薩世界として意識されていた段階。②那智山を補陀落山に擬し、観音の所住地として現世利益的霊地として考えられ、信仰されて来た段階。③こうした那智山を補陀落山と考えるとともに、それよりさらにすすんで中国の補陀落

補陀落渡海関係遺跡

A	千葉・鋸山(遺跡)
B	鎌倉・材木座(寺址)
C	静岡・久能山(現存)
D	那智・勝浦(現存)
E	高知・足摺岬(遺跡)
F	熊本・玉名(遺跡)



東支那海

山に参詣しようとする意欲が生じた、即ち補陀落山渡海といわれる信仰形態の発生。以上が、成田先生の示された補陀落信仰の発展段階であるが、この説は発表されて以後、四半世紀を経て現在、定説化されているといつてよいであろう。

特に、第三段階の補陀落渡海信仰は、補陀落信仰を特徴づける最大のものであると考えられるが、これは日本古来からの一種の神仙思想、即ち、海の彼方に実在する一種の仙境に対するあこがれを基盤とする信仰であることを成田先生は指摘しておられる。たとえば神話として広く知られている浦島太郎の物語や、海幸彦、山幸彦の伝説は、人間界とは次元を異にした幸福の源泉地としての常世国、海神国でありながら、そうした国へ行けるという可能性、即ちこれらの国が現世の延長にあるということを暗示しているのであり、日本で独自に発達した補陀落渡海の信仰の基盤には、こうした日本人固有の宗教意識が潜在しているというのである。

ところで、こうした説をふまえて補陀落信仰を見る時、それが、阿弥陀信仰におけるところの浄土思想とは対極に立つものであることが知られよう。即ち、厭離穢土欣求浄土の言葉に象徴されるように、阿弥陀信仰における極楽浄土は現実世界とは明確に区別されているわけであるが、一方、観音の補陀落浄土の場合はその区別が不明瞭であり、むしろ現実世界の延長上に存在する幸福の源泉地としての性格が濃厚であるということである。たとえば、三十日間の食糧を準備して補陀落渡海を試みる等といった事例は、この観音の補陀落浄土に対する人々の意識が那邊にあったかを知る上で示唆的であろう。そして、こうした信仰の背景に、観音信仰の特徴である現世利益の思想を見ても、これもまた充分に可能であろう。

さて、この補陀落渡海であるが、実際にはどのような場所から、どのようなコースをとって行なわれたのであろうか。そのコースを確認してみることによって、補陀落信仰の実際の姿、もしくはその信仰の背後に潜む日本人固有の宗教意識等がさらに浮び上ってくるのではないかと思われる。

まず、日本における補陀落渡海で有名なのは、和歌山県東牟婁郡那智の勝浦町にある補陀落山寺であるが、ここからの補陀落渡海は中世までは勅許制であったといわれる。添付の地図で確認すると、補陀落渡海は中国、インドをめざす(南方洋上の補陀落は具体的には、中国、インド方面を指す)のであるから、当然そのコースは、熊野灘から四国沖を通り、天草灘をよぎって東支那海にむかうコースである。また、足摺岬(四国、高知県)にも玉名(九州、熊本県)にも補陀落信仰の遺跡があるが、これらはやはり、熊野灘から四国沖を通り、東支那海に抜けるコースの途中にあることが地図上確かめられるのである。このように補陀落渡海は適当な方向にむかつて行なわれるものではなく、一定のコースのあることが認められるのであり、このコースにあ

って補陀落渡海の信仰習俗が残されていることが知られるのである。

ところで、五来重博士は、『補陀落渡海の謎』^④と題する論文の中で、日本古来の信仰に山岳宗教の流れと海洋宗教の流れとがあったことを指摘しておられる。この海洋宗教の流れは、日本人の大部分が農耕生活を営むようになってから、山岳宗教に吸収されていたが、その痕跡は文献や伝承から容易に確認しようという。たとえば、現在も行なわれている四国の遍路も、もとは辺路（へじ）でありそれが「へんろ」と読まれるようになり、さらに遍路の漢字があてられるようになったものであるという。この辺路修行は、海洋宗教の修行の実践であり、弘法大師空海もその修行時代、四国においてこの辺路修行を実践しており、それが後世、大師信仰の遍路修行に変化して今日に伝えられているのであるといわれる。

このように、四国は海洋宗教の盛んな所であったことが知られるのであるが、一方、熊野信仰も、この海洋宗教が先行していたと見られている。熊野における信仰には捨身行に関するものが多く、入定、入水、火定、投身などに関する熊野の文献、伝承は極めて多い。たとえば、はやくも『日本霊異記』^⑤には、熊野において『法華経』のための投身行を行なった僧の話が載せられており、また時代は降るが、僧文寛の那智の大滝への入水、平維盛の入水等は『平家物語』によって広く知られている。特に、平維盛の入水が、補陀落渡海の重要な聖地である山成島であるとされていることは、この入水往生と補陀落渡海信仰との関連性を考える上で極めて示唆的である。

五来博士は、奈良時代から平安初期以降の捨身行は、仏教信仰の実践的表出であって、往生なり成仏なりをもとめて現身を捨てるとい形をとるものであるが、その中で観音信仰の表出として表われたのが補陀落渡海で、これが辺路信仰のメッカである熊野と四国に集中しているということは、補陀落信仰と辺路、即ち海洋宗教との関連の深さを示していると指摘されている。

このように、海洋宗教というものを軌軸に考えてみると、添付の地図上に見られる補陀落渡海の関係地が、なぜ補陀落渡海の関係地となったかが容易に理解されるのであり、このことはまた一方で、成田俊治先生が指摘される補陀落即ち海神国思想とも矛盾なく理解されるのである。そしてまた、熊野灘から四国沖を通り東支那海へむかうという補陀落渡海特有のコースも、日本古来の海洋宗教と、『華嚴経』等に説かれる補陀落浄土南方上説とが結合した結果、表われいたものであることが推察されるのである。

註① 成田俊治「補陀落信仰の性格」（仏教論叢 No.6）

② 『吾妻鏡』天福元年五月二十七日条

③ 足摺岬の補陀落渡海に関する伝承は『とわずがたり』巻五、『蹊陀山縁起』

等に見られる。また玉名の補陀落渡海については、玉名市高瀬、繁根木八幡の稲荷山古墳に立つ、補陀落渡海碑がその事実を証明している。

④ 五来重「死と信仰——補陀落渡海の謎」（中外日報 S 59・4・2）

⑤ 『日本霊異記』下巻第一

インターネット公開許諾のない文章には
墨塗り処理を施しています。